

ハーフタイムに関するガイドライン

気温 (参考)	暑さ指数 (WBGT)	熱中症予防運動指針	
35℃以上	31℃以上	運動は原則中止	特別の場合以外は運動を中止する。 特に子どもの場合には中止すべき。
31～35℃	28～31℃	嚴重警戒 (激しい運動は中止)	熱中症の危険性が高いので、激しい運動や持久走など体温が上昇しやすい運動は避ける。 10～20分おきに休憩をとり水分・塩分の補給を行う。 暑さに弱い人※は運動を軽減または中止。
28～31℃	25～28℃	警戒 (積極的に休憩)	熱中症の危険が増すので、積極的に休憩をとり適宜、水分・塩分を補給する。 激しい運動では、30分おきくらいに休憩をとる。
24～28℃	21～25℃	注意 (積極的に水分補給)	熱中症による死亡事故が発生する可能性がある。 熱中症の兆候に注意するとともに、運動の合間に積極的に水分・塩分を補給する。
24℃未満	21℃未満	ほぼ安全 (適宜水分補給)	通常は熱中症の危険は小さいが、適宜水分・塩分の補給は必要である。 市民マラソンなどではこの条件でも熱中症が発生するので注意。

※暑さに弱い人：体力の低い人、肥満の人や暑さに慣れていない人など
(公財) 日本スポーツ協会「スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック」(2019)より

① WBGTが31℃以上であった場合

○ハーフタイム7分を実施

○第3、4Qの残り2分30秒を切った時点で、1分間の給水タイムを設ける。(給水時期については、審判の判断とする。また、2分30秒に近い時期にタイムアウトがあり、給水タイムの必要がないことを両チームが了承した場合は設定しなくてもよい。)

※給水タイムの際には、コーチやチームスタッフは戦術的な指示をしないこと。(タイムアウトではなく、あくまでも給水のための時間であるため。)

② WBGTが28～31℃であった場合

○ハーフタイム7分を実施

○各チーム指導者は、各クォーターでタイムアウト取った際には必ず水分補給させる。
(試合の流れよりも、選手の身体的負担の軽減を優先すること。)

WBGTが28℃以下の場合

○ハーフタイム5分を実施(現行ルール通り)

○各チーム指導者は、各クォーターでタイムアウト取った際には必ず水分補給させる。
(試合の流れよりも、選手の身体的負担の軽減を優先すること。)

①②③の場合は、会場にアナウンスを行い、条件および各チームへの働きかけの共通理解を図る。
(時刻によって環境が変化した場合は、その都度変更していく。)なお、今大会においては、順位決定戦を行うチームが同一会場になることから、平等性が保たれていると判断し、各会場での状況に応じて対応することとする。